

POLISH letter

No.13, 2025



第9回POLISHセミナー 知ろう！学ぼう！考えよう！

2025年9月27日（土）14時より、第9回POLISHセミナーをオンラインで開催し、約60名の学生および研究者の皆様にご参加いただきました。今回は、株式会社東北テクノアーチ代表取締役社長の水田貴信先生を講師にお迎えし、「研究成果を発表する前に知っておきたい研究成果と特許出願について」というタイトルでご講演いただきました。

講演では、

- 1) 研究成果を特許出願する意義、
 - 2) 特許出願に向けて取り組むべきこと、
 - 3) 特許出願時に成果報告や論文発表で注意すべき点、
- の3つのテーマについて、特許に詳しくない方にも分かりやすい視点から解説していただきました。また、水田先生が実際に研究者から相談を受けて特許を申請する中で、「事前に知っておくべき」と感じられた多くのポイントについて、論文発表との対比を交えながら丁寧にご説明くださいました。

「特許」というと煩雑でとっつきにくい印象を持たれがちですが、早めに相談し理解を深めることで多くのサポートを得られることを実感できた、有意義で視野の広がる機会となりました。

セミナー後アンケートの質問に対する講師からのご回答

質問 ①

「昨今、査読付きジャーナルに論文投稿する前にプレプリントに投稿する流れがありますが、この場合に特許出願についておいて注意すべき点がありますか。例えば、読者のフィードバックによって内容の発展や改善をした場合に特許における扱いはどうなるのでしょうか。」

回答 ①

プレプリントありのジャーナルに投稿をご検討だとすれば、即発明が公開されることになると同義だと思います。従いましてこの場合は、投稿前に特許出願を完了させるというマネジメントが両方達成するために必要だと思います。読者からのフィードバック量に比して、投稿した内容のほうが発明の技術構成に占める割合が多いと思いますので、同フィードバックを足して出願したとしても、プレプリントとして公開済みの内容に比して進歩性が認められない、として特許出願後の審査において厳しい場面に向き合う可能性も予想されますので、この側面からも投稿前に特許出願なさるのがよいと考えます。

質問 ②

「企業側も大学からのイノベーションに期待していると聞きますが、企業側から提案された共同研究に取り組む場合、大学発と異なる点・注意する点はありますか。」

回答 ②

共同研究テーマ、実施内容が漠然と、幅広に記載されていないようにする必要があるかと思います。企業との共同研究とは独立にラボで進めている／進めてきたというテーマが共同研究の範囲と読めるように定められていると、学会・論文発表や特許出願という判断と行動の自由度に制限がかかるということも起こり得るからです。幅広なテーマ、共同研究内容に取り組む場合には、それに見合う共同研究費が計上されていることも重要です。研究費がショートするという状況におちいり、運営交付金や科研費など、本来独立に進めてきたテーマ、研究用の資金からショート分を持ち出してしまおうようなことは避けるべきだと思います。共同研究でやることと、それ以外の独自でなさるご研究とを、きちんと分けた内容で取り組むことが大事と、思います。

